慈しみの古都・奈良

春日大社 学びの会 2023

春日大社と興福寺 ―重なりあう神と仏―

日時　2023年 9月3日（日）13：00開演
会場　よみうり大手町ホール（東京都千代田区大手町）
主催　春日大社、読売新聞社
協賛　岩谷産業株式会社、住友電気工業株式会社、ダイキン工業株式会社、西日本電信電話株式会社、関西電力株式会社、株式会社神戸製鋼所、サントリーホールディングス株式会社、株式会社大丸松坂屋百貨店、阪急電鉄株式会社、日立造船株式会社、株式会社三菱UFJ銀行、小山株式会社、奈良豊澤酒造株式会社、株式会社明新社

春日大社・中門　撮影：桑原　英文

興福寺・中金堂

基調講演 1

春日大社 宮司
花山院（かさんのいん） 弘匡（ひろただ）

始祖や教義を超える神仏習合の包容力

仏教伝来以前日本には「八百万（やおよろず）の神」といって大変多くの神様がおられ、それぞれの場所で大切にされていました。538年に仏教が入ってくると、人々は信仰とともに、哲学や薬学、建築など、最新の外国文化としてそれを受け入れます。そしてこの素晴らしい仏教のお経を、神様にもお聞かせしたら喜ばれるのではないかと考えます。お経を奏上してお楽しみいただき、人々が豊かになるようお力を出していただこう。それが神仏習合の始まりでした。

平安時代になると、神様と仏様は一体だという「本地仏」思想が表れてきます。春日大社でも承平7年（937年）、参籠していた貴族の娘が「春日明神は慈悲万行菩薩である」という春日明神の託宣を受けたと伝わっています。また、関白・藤原忠実の日記「殿記」には、天永2年（1111年）9月24日、なかなか参拝に行けない春日明神への謝罪として、自邸で不空羂索観音経を暗唱したと書かれています。なぜ不空羂索観音経なのかというと、その300年前、藤原冬嗣が父の追善供養のために氏寺である興福寺に南円堂を建て、そこに不空羂索観音様をお祀りしているんですね。忠実は永久4年（1116年）には、春日大社の参道に立派な五重塔「春日御塔」を造り、そこへ春日大明神として不空羂索観音を納めています。神様のお姿を仏像で表した、春日において最古の例です。

平安時代後期になると、神様を描いた神道曼荼羅、中でも最初期に作られたのが「春日曼荼羅（まんだら）」で、最も多く作られた神道曼荼羅です。春日大社全景を描いた「春日宮曼荼羅」には、第一殿の武甕槌命（タケミカヅチノミコト）様は釈迦如来に、第二殿の経津主命（フツヌシノミコト）様は薬師如来にと、神様が仏様の姿で描かれています。花園天皇の日記「花園天皇宸記」の正中元年（1324年）12月25日のところには、貴族がみんな春日曼荼羅を持ち、その前で社頭するように拝礼していると記されています。

平安時代から江戸時代まで、病気や災害、飢饉で大勢の人が亡くなりました。当時の人々にとって生きていくということは、悲しい死と隣り合わせに過ごすということでした。そうした中で、始祖や教義を超えて、人々の悲しみを温かく包み込む力のある神様と仏様が一緒になって人々を救ってくださる。これ以上ありがたいことはありません。これが神仏習合という信仰の力だったのです。神様と仏様の温かさを感じ、信仰していただく中で心を癒やされ、支えられながら過ごしていく。今のような時代にこそ再び、神仏が一緒であることが求められているのではないかと思います。

プロフィル

昭和37年、佐賀県生まれ。國學院大學卒業後、県立奈良高校教諭等を務め、平成20年4月に春日大社宮司に就任。花山院家は、藤原道長の孫で関白師実の次男、左大臣家忠を祖とし、太政大臣にも就く家で、花山院宮司は第33代当主にあたる。春日大社宮司としては明治以降で11代目。現在、公益社団法人南都楽所会長、奈良の鹿愛護会名誉会長、帝塚山大学特別客員教授なども務める。

著書『春日大社のすべて』 中央公論新社
『神道　千年のいのり　春日大社の心』 春秋社

基調講演 2

興福寺 貫首
森谷（もりや） 英俊（えいしゅん） 師

融合により生まれる芸術のルーツ　神仏習合

異なる宗教や思想が出会うと熱を帯び、熾烈（しれつ）な戦いとなるのはヨーロッパや中東の例を見れば分かる通りです。しかし日本では神と仏という異質のものが融合し、薪御能（たきぎおのう）のような新しい芸術を生み出してきました。そうしたものが時代によって形や姿を変えながら、なお新しいものを作り出していく原動力、それが神仏習合の精神なのではないかと思っています。

神護景雲2年（768年）に春日社が創建されると、大和は春日の神国、春日の神を護持するのは興福寺だから大和国は興福寺が治めるという理論の下、大和国に荘園、寄進領を拡大した興福寺は、大和国のほとんどを寺領化していきます。さすがに神様を祀ることはできませんでしたが、長承4年（1135年）に若宮が創建されると、その祭事の一切合切を賄って「おん祭」を国を挙げての盛大な祭りに仕立て、名実ともに大和国を治めていくことになります。当時は南大門のところに祭事を取り仕切る別会五師（べちえのごし）と共に興福寺の僧兵たちが集まり、おん祭の進行を管理していたということです。

このようにして神と仏が溶け合うことで生み出されてきたものの一つが薪御能です。薪御能は貞観11年（869年）、西金堂の修二会に始まりを見ることができます。修二会では春日の花山から持って来た神聖な薪（御薪＝みかまぎ）を、仏様、神様に捧げる献灯とします。その灯の下に魔物が入らないよう結界を施すのですが、その所作をまねていた人たちが猿楽のご先祖方です。やがて衆徒や国衆が願主となり、主宰する「薪猿楽」が生まれます。外山の宝生座、円満井の金春座、坂戸の金剛座、ちょっと遅れて伊勢の方から来た磯城郡・結崎の観世座。この四座が今の能楽のルーツです。春日社興福寺がパトロンとなり、彼らは芸事を磨くことに専念できました。観世の元清（世阿弥）の洗練された舞、謡に魅了された時の将軍・足利義満は、興福寺修二会には四座が必ず出仕せよと厳命されています。

世阿弥は嘉吉3年（1443年）頃に亡くなりますが、こうしたものがなぜ残ることができたかと言いますと、ルーツが宗教にあるからだと思います。神仏の御前という神聖な舞台で演者が舞い謡う時、彼らは日常を飛び越え幽玄の世界に入り、魅了された観衆と共に爆発的一体感が生まれます。それが感動を呼ぶのですね。それはやはり宗教が基底にあるからだろうと思いますし、日本の場合は特に、この神仏習合にあるのだろうと思います。

プロフィル

昭和24年、神奈川県生まれ。法政大学法学部を卒業後、鎌倉市役所勤務などを経て、昭和55年に興福寺へ入寺。平成3年、慈恩会竪義加行を成満。興福寺子院大聖院住職となる。平成13年に興福寺執事長、平成26年には湘南別院院主に就任。令和元年から興福寺貫首を務める。

著書『興福寺のすべて』共著　小学館
『唯識 ―こころの仏教― 』共著　自照社出版
『古寺巡礼 興福寺』共著　淡交社　　その他

「春日大社 学びの会」

対談

春日大社と興福寺
―重なりあう神と仏―

春日大社 宮司 **花山院 弘匡**

×

興福寺 貫首 **森谷 英俊** 師

春日社興福寺の神様と仏様。守り続ける神仏習合

社参式や若宮おん祭 引き継がれる神仏習合

森谷　興福寺は和銅3年(710年)、藤原京から平城京の都へ移ってきたと言われております。天平2年(730年)に光明皇后様が五重塔をお造りになられ、天平6年のお正月には、西金堂が建立されて阿修羅像をはじめとする天平乾漆群が安置されました。五重塔は5度の火災に遭い、今あるのは約600年前に建てられた6度目の塔です。明治33年(1900年)に簡単な修理をしてから120年経つので、現在少しずつ修理を進めています。10年がかりの長い道のりですが、できるだけ速やかに修理し、後の子孫たちに伝えさせてもらえればと思っています。

花山院　春日大社は称徳天皇の勅命で神護景雲2年(768年)に創建されましたが、それ以前から御蓋山(みかさやま)、春日山は神様のおられる神山でした。「続日本紀」には717年、「御蓋山の南に神祇を祀る」との記述があり、遣唐使・阿倍仲麻呂の安全祈願祭が行われたことがわかります。平城京を護る神様ですから国家国民を護る神様であり、藤原氏の氏神様でもあります。興福寺とのつながりでは、1月2日の社参式に僧侶の方々に来て頂き、神前でお経を奏上して頂きます。若宮おん祭では、「馬長児(ばちょうのちご)」というお稚児さんに、興福寺で「法院権大僧都(ほういんごんだいそうず)」という位を授けて下さいます。

森谷　はい。朝早く、春日の神官様たちと来られ、広間で授与式が行われます。春日の神が姿を現される(影向＝ようごう)部屋に入るため、浄衣に着替え、授与の前後に若宮のご祭神・赤童子に礼を尽くす所作が今も残っております。

神聖な薪を 春日の神に捧げる薪御能

花山院　伝統に則りお祭りに参加して頂いています。おん祭は1000人・馬50頭の行列がお渡りをし、一の鳥居をくぐったところにある「影向の松」の前では、神様に喜んで頂くために能楽師と田楽師が演じます。また初夏の薪御能では、ご本社で「咒師走(しゅしはしり)の儀」、若宮で「御社上(みやしろあがり)の儀」を昼間に奉納され、夜は興福寺南大門跡の「般若の芝」にて薪を焚いてなされます。

森谷　神山の御蓋山からお運びした神聖な薪「御薪(みかまぎ)」を春日の神と興福寺の仏に捧げ、そのお力の下に法要と行事が無事に済むことをお祈りして行っています。今では全国各地の野外で薪能と称するものが行われています。大変不遜な言い方かもしれませんが、本当は春日社興福寺を離れて薪能はないんです。

花山院　神様、仏様のご神気を浴びた火をともして行うのが、本来の薪能ということですね。ところで興福寺では、薬師寺と「竪義(りゅうぎ)」という口頭試験をされますが、試験の当日に「夢見の儀」というのがあるそうですね。

森谷　興福寺または薬師寺の管長が春日の神のお使いとして、今日はこういう問答がされるんだよと言って、袖の下を通す作法があるんです。21日間の「前加行(ぜんけぎょう)」で問答は大体暗記しているのですが、春日様の慈悲で教えていただけるという所作が伝えられています。

花山院　試験はお堂でされるんですけども、その入り口は「影向の門」といいます。試験官を務める僧侶の方は、春日の神様の言わば依代(よりしろ)となって判断されるという形になっているのです。

神と仏に守られた 春日社興福寺の歴史

花山院　さて、ここからは鎌倉時代に描かれた「春日権現験記絵巻」から幾つか紹介します。全20巻、長さが50メートルぐらいある巻物です。11巻の話に平安時代の後期、永万元年(1165年)7月に六条天皇が数え2歳で即位されます。すると春日の第三殿の神・天児屋根命(あめのこやねのみこと)様が、幼い人が世を治めるようでは良くないという託宣をされ、人々を守らないと出ていかれます。興福寺のお坊様が懸命に般若心経を唱えられたところ、神様がお戻りになられる夢を見ます。絵巻には、一の鳥居から戻ってこられる神様が、地蔵菩薩の姿で描かれています。地蔵菩薩様に付き従っているのは神官で、当時の神仏習合の考え方を表しています。

5巻には、藤原俊盛という人のことが描かれています。この方はお父様を早くに亡くして家督を継いだのですが、本当に貧乏で大変でしたが、一生懸命に家のために働いておられました。そこへ春日社の偉い神官が来られて、「春日の神様をしっかりとお参りしなさい」と言います。俊盛は一生懸命にお祈りし、やがて鳥羽上皇の近臣となり、出世をして栄華を極めるようになります。けれども何かはかなさを感じ、春日の神様の元で参籠をされます。すると春日明神から仏門に入るよう託宣があり、俊盛は仏門で精進し、充実した人生を過ごします。俊盛が亡くなる3年前、ある人が、俊盛が極楽浄土へ向かう夢を見ます。仏様と蓮の台の上に乗り、春日の神官が付き従っています。つまり、俊盛は仏の道に精進したので、お金では測れない充実した人生を過ごして極楽浄土へ旅立った、素晴らしい人生を全うしたということが描かれています。絵巻に描かれた春日社興福寺の神様と仏様の歴史は、当時生きていた人々の生きざま、神と仏に守られ温かく豊かに生きた人生の物語です。

森谷　仏教で最も大事にするのは慈悲の心です。春日のご神威は、慈悲万行菩薩。相手のことも私のことも差別なく、平等に扱う。その心は、これからの世界に必要なことだろうと思いますし、そうしたことを守っていかなければいけないと思います。